

よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

蔵通信 十八号

2009.5

第十七話 琵琶が語る縁

絵金百話 シリーズ

発行：絵金蔵運営委員会
 発行日：2009年5月1日
 〒781-5310
 高知県香南市赤岡町538
 Tel.Fax 0887-57-7117
 ekingura@mxi.netwave.or.jp
 http://www.ekingura.com/

BAZAAR!

第4回 絵金屏風修復保存バザー開催のご案内

2009
8.29 (土)
 16:00~18:00

於：弁天座前（香南市赤岡町）

日用品を中心に、食器・雑貨等を格安販売いたします。

☆本バザーの収益は全て絵金屏風修復保存のための活動に寄付いたします。

お問い合わせ：絵金蔵 Tel.0887-57-7117

主催 赤岡絵金屏風保存会・絵金蔵運営委員会

びっくり！
 掘り出しモノも
 あるとな...

同日「桂かい枝落語会」開催！
 開場17:30 開演18:00
 入場料2,500円(当日3,000円)
 お問い合わせ 弁天座 Tel.0887-57-3060

協力 弁天座運営委員会



絵金屏風修復・保存活動へ —ご寄附のお願い—

赤岡に残る絵金の屏風絵23点は、幕末より祭礼文化とともに地域の所蔵家の手によって伝えられてきました。平成17年からは絵金蔵の収蔵庫に保管されていますが、約150年の時を経て、絵の具の剥落を中心とする傷みがありここに見られるようになってきました。

現在、赤岡では従来それぞれ活動していた4地区と個人の所蔵家がひとつになり「赤岡絵金屏風保存会」を立ち上げ、絵金蔵運営委員会とともに屏風絵とそれを飾る祭礼文化をより長く後世に伝えていくためのさまざまな活動を行っています。

どうか、赤岡の絵金屏風の修復・保存とそれのための活動に、皆さまのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

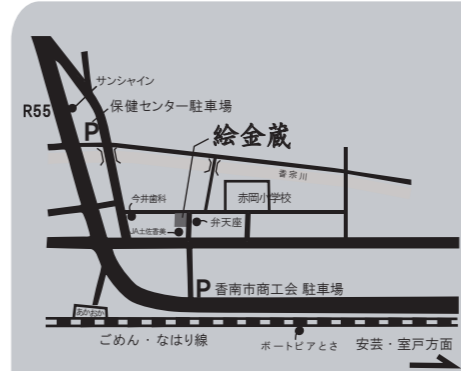
赤岡絵金屏風保存会・絵金蔵運営委員会



土佐香美農業協同組合 赤岡支所
 普通口座 0006101
 赤岡絵金屏風保存会 会長 武市徹
 (アカオカエキンピョウホソノカイ カイチョウ タケチトオル)

〔絵金蔵〕

開館時間
 午前9時～午後5時
 (入館は午後4時半まで)
 観覧料
 大人500円、高校生300円
 小・中学生150円
 (15名以上の団体は各50円引き)
 休館日
 毎週月曜日
 (月曜が祝日の場合は火曜)
 12月29日～1月3日



幕末土佐の芝居絵師・金蔵(通称・絵金)。彼は土佐各地の祭礼に多くの芝居絵屏風を残しました。絵金蔵は、平成17年2月、赤岡の地に残る23点の芝居絵屏風を収蔵・保存するために作られた施設です。

絵金蔵の三つの使命

- 年一度 絵金の文化を守るため
- 伝承 次世代へ伝えるため
- 縁結び 地域を超えて世代を超えて

絵金百話

第十七話 琵琶が語る縁えにし

まつなみけんぎょうび わ
松波検校琵琶

げんべいぬのびきのたき
源平布引滝

< 概要 >

『源平布引滝』は享保18年（1733）大阪・角之芝居にて歌舞伎として初演されました。作者は並木千柳・三好松洛。『浄瑠璃集 下』（日本古典文学大系52 岩波書店 1967年10月）「解説 源平布引滝」によると、従来寛延2年（1749）大阪・竹本座での公演が初演とされていましたが、享保19年正月版の役者評判記に「六月十五日より布引の滝と申す、水狂言にニタ役のつとめ、初日に目をまはわされ、役をお休み、七月六日より新地のしばみにて同じ狂言を水なくしていたされ」とあり、当初は水を使った夏らしい演出の歌舞伎であったようです。のち、江戸時代末期になって「松波検校琵琶の段」が増補、書き替えがなされ、以後くりかえし上演されることとなりました。

本作のテーマは源平の興亡、そこに繰り広げられる人間ドラマが見どころです。ストーリーは源義朝亡きあとより始まります。

息子重盛ごんげんの諫言をきかず、平清盛が帝を鳥羽離宮へ押し込めたため、義朝の弟木曾義賢きそよしは娘待宵まつよいと多田蔵人行綱たたくらんどゆきつなに帝を離宮から奪い、源氏再興を計るよう言い含め、自身は平家の討手を引き受け壮烈な死を遂げる。義賢家臣の娘小万こまんは源氏重代の白旗を預かるが、平家方に追われて琵琶湖を泳ぎ、平宗盛の御座船に引き上げられる。平家の侍で源氏に心を寄せる齊藤別当実盛さいとうべっとうみねもりは、白旗が平家に奪われるのを恐れ小万の片腕を切り落とす。小万は死ぬが、白旗は亡き義賢の妻葵御前あおいごぜんの手に戻る。平家方は小万の父九郎助がかくまう葵御前懐胎の子を殺そうとして、齊藤実盛らを遣わすが、実盛の情ある計らいで無事男子が誕生し、のちに木曾義仲となる。

やがて鳥羽離宮の後白河法皇のもとに、平重盛の命を受けた琵琶法師松波検校、実は多田蔵人行綱が出仕する。しかし先に忍び込ませていた娘小桜こざくらが同じく宮仕への僕と見せかけて監視していた平氏の侍に父の名を明かせと責めさいなまれ、ついにこらえ切れず正体をあらわし、娘ともども紅葉山へ逃れる。

今回ご紹介する松波検校琵琶の段の主人公、多田蔵人行綱は平安時代末期に実在した武将で、摂津多田の地に武士団を作った源満仲より八代目に当たる多田源氏の嫡流です。『平家物語』では安元3年（1177）の鹿ヶ谷の陰謀が起きた際、反平氏の大將にと望まれたものの、これを平清盛に密告したとされ、また『玉葉』は木曾義仲と後白河院の関係が悪化した際は院方に付き、院御所の防衛に当たったと伝えています。

絵金が描いた「松波検校琵琶の段」、娘の折檻せつかんを目前にして思わず撥ぼちを落とす多田行綱の悲痛な表情、眼を血走らせた平次の鬼気迫る形相、小桜の可憐さ、ここでも原作のストーリーが絵画として見事に構築されています。どうぞご堪能あれ！

赤岡絵金芝居絵屏風 県指定報告会開催

今年、赤岡の芝居絵屏風23点が高知県保護有形文化財に指定されたことを記念して4月15日、弁天座にて県指定報告会を開催いたしました。多摩美術大学青木淳氏をゲストに招き、所蔵家の思いが結集して県指定に至った経緯や今後の展望が語り合われました。また特別に本物の芝居絵屏風2点を舞台に展示し、間近でじっくりと絵を見て頂けるまたとない機会となりました。



ゲストの青木淳氏。高知女子大学助教授として在任中、辻惟雄、中西進氏らを招き、フォーラム「絵金-狂想の舞台裏-」を開催、今回は絵金研究や町の活性化のあり方に様々な提言を頂きました。



赤岡絵金屏風保存会会長の武市徹さん。芝居絵屏風を強い思いで守って来られた町の長老です。



第3回 絵金屏風修復保存バザー開催

恒例となった絵金屏風修復保存バザー。5月3日、弁天座運営委員会の協力を得て、映画「漂流」上映にあわせて開催しました。ご近所から寄付いただいた日用品はじめ所蔵家の手焼きせんべい、絵金蔵ボランティア手作りのレース編み製品などを販売。今後も弁天座主催イベントの際、同会場にて行う予定です。



赤岡に帰省するたび、絵金蔵を手伝ってくれる真帆ちゃんと和磨君。



映画「漂流」は1981年につくられた北大路欣也主演の映画。吉村昭原作の無人島長平を主人公とした物語は、実在した土佐出身の漁師がモデル。無人島で12年間暮らした長平と、彼の命を支えたアホウドリが弁天座にタイムスリップ!?

商品はすべて100円～500円まで。「いや～、これ見覚えある～」なんて声もありつつ、皆さま楽しんでお買い上げ下さったようです。





ここ札場より少し西部の小高い山上にある禅師峰寺（通称、峰寺）の観音の祭り（お十七夜）の際行われる宵祭り。集落の中心、かつて絵馬堂があった場所に4点の芝居絵屏風を飾る。普段、この場所には文字通り地区のお知らせを掲示しており、バス停も兼ねる。

札場



子どもたちの奉納相撲。



広い土俵の脇に台提灯が建てられ、3枚の芝居絵屏風が並ぶ。



土俵の奥にある河伯神社。キュウリを握りしめた子どもたちが次々にお供えする。

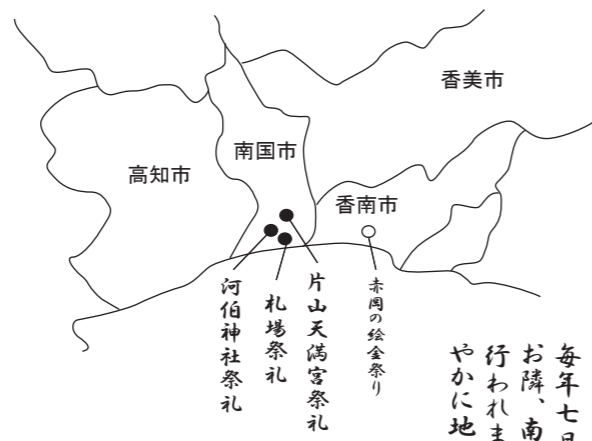


橋のたもとにもカッパが...

河伯神社



「源平布引滝 松波検校」の前段。平宗盛の御座船に引き上げられた小万が齊藤別当実盛に腕を切り落とされる場面。源氏の白旗が見える。



毎年七月、絵金祭りが行われる香南市赤岡町のお隣、南国市でも絵金にまつわるユニークな祭りが行われます。担い手が少なくなつた近年も、ひそやかに地域の方の手で守り続けられています。

「源平布引滝」と南国市の祭礼

もうひとつの

片山神社



ここでも子ども相撲が行われる。

15点もの芝居絵屏風を拝殿に並べる。かつては境内に台を組んでいたと伝える。



現在の今井家。明治40年頃の建築。雨除けにつくられた水切り瓦が美しい。



明治33年、県知事宛の日曜市開催許可願。赤岡商人たちの連名で町内各地区で週替わり、輪番制で行い、「人馬車通行妨害二相成ザル様注意可致候」と見える。



大正6年正月、山城屋三代目の誕生を祝って大凧揚げが行われた際の写真。今井一家と、従業員一同（現、赤岡町横町通の今井家前）。

山城屋の歴史

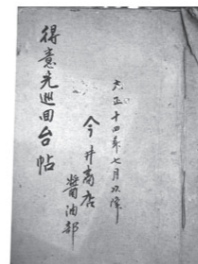
赤岡の今井氏は初代祐之丞にはじまり、「夷屋」と称する廻船業を営んでいたようです。のち明治17年（1884）絶家した本家に代わって分家独立した今井文次により「山城屋」が創設されました。

当時扱っていたのは雑貨や卵、煙草、塩、醤油など。上方との取引もありました。「今井の古縄」（荷造りの縄をとことん再利用すること）や「今井の飯は噛まいでも炊いてある」（早く食事を済ませて仕事に向かわせる）など商売人魂を感じさせる逸話が伝えられています。

現当主、今井一雄氏は歯科医としてこの地で医院を営むかたわら、これらの取引や製造に関わる膨大な史料を整理、解明に努めています。



香美郡・長岡郡と土佐郡の北半分の広範囲にわたる山城屋の煙草の商圈。明治36年より昭和6年に制度が廃止されるまで、政府機関より煙草販売を委託され、小売り店に卸す、元売捌人として販売を続けた。



醤油販売の得意先リストから製造にまつわる、麦・大豆・塩・水の配合、製造工程の細かい注意事項などの記録が残る。



参考：今井一雄「山城屋の歴史」私家版 2009年

絵金の時代

V パトロンたちの奮闘

赤岡に残された23点の芝居絵屏風。その背景には絵金をはじめとする絵師たちの生活を支えた商人の存在がありました。そうしたパトロンと絵金との交流を示す資料は実はほとんど確認されていません。しかし、かつて赤岡有数の商家で芝居絵屏風の所蔵家でもある今井家には、商人たちの姿を生き生きと伝える近代以降の史料が数多く残されています。時代を駆け抜けた赤岡商人の奮闘ぶりをご覧ください。



大正11年、山城屋初代当主は夜須・城武氏と香美塩元売捌合名会社を設立。

『宇田友四郎翁』にみる赤岡

明治11年から15年まで赤岡に在住し初代今井文次氏とも親交のあった実業家・宇多翁の伝記には、明治11年赤岡が郡役所所在地となってより、さらに繁華街として栄えた様子が記されています。

赤岡といふ処は…酔ひ遊ぶ歓楽郷として知られ、歓楽に付き物の演劇は、高知よりも昌んに、高知から態々見物に来る状態で、土佐歌舞伎の元祖と称せらるゝ手結浦の市川芥蔵（要蔵）、前濱の幸右衛門、十市の琴系などに…などを加へた大芝居が赤岡有志の発起で、春秋二季に必ず催され、近郷を引きつける人気を呼び、加ふるに演劇に付きものゝ、当時の所謂御茶屋が、驚く程此の地に発達し、その為め阿波方面から、海岸通りに出稼ぎに来る他県の芸妓は、皆赤岡に腰を据へるという状態で…

『宇田友四郎翁』（宇多翁伝記刊行会 1939年）



げんべいぬのびきのたき まつなみけんぎょうび わ
源平布引滝 松波検校琵琶

二曲一隻屏風/紙本著色/182.0×169.0cm
 赤岡町本町一区所蔵

— あらすじ —

平清盛によって鳥羽の離宮へ押し込められている後白河法皇のもとに、平重盛の命によって琵琶法師松波検校、実は多田蔵人行綱が出仕する。清盛の謀を阻止するため娘小桜、妻待宵も共に屋敷に忍び込み働いていたが、行綱は小桜から待宵が清盛を討ち損じて、既に殺されたことを聞く。無念やる方ない行綱は、今宵仇を討とうと小桜に案内させ、屋敷の奥へ通る。

法皇の3人の仕丁（宮廷の雑役にたずさわる人々）らは寒さの余り寵愛の紅葉を焚いてしまい、お咎めを恐れていたところへ、案に相違して許された上、酒を賜り飲むほどに平次は怒り上戸、藤作は笑い上戸、又五郎は泣き上戸の様子をあらわす。

平次は怒りにまかせて小桜を捕え、父の名を明かせと責めさいなむ。そこへ通りかかった行綱は驚きとりなそうとするが、その正体を知る平次は小桜を折檻するか、琵琶を弾くかどちらかにせよと迫る。仕方なく行綱は琵琶を奏でるが、娘の折檻を目前に、糸が乱れるのを抑えきれない。3人の仕丁は実は平重盛の家臣で平次は難波六郎、藤作は越中次郎、又五郎は上総介忠清であった。3人は正体をあらわにした行綱に切りつけるが、行綱は小桜を小脇に抱えて紅葉山へ逃れる。

■ 内心に愁有れば音律に顛はるる

「それは弾かれまい是ばかりは機嫌らしう弾れぬ筈じゃ…内心に愁有れば音律に顛はるる四筋の糸の善悪邪正うかつには弾れまいいつそ茲へおりて此小倅の詮議して下さんせぬか」という平次に、娘を前にした苦渋の心を悟られまいと琵琶を手にとる松波検校。撥を落とす姿から、このあとの場面、こらえかねた検校が階段を転び下りて泣きながら娘を抱きしめ、多田蔵人行綱としての正体をあらわす直前を描いたものと思われます。



法皇寵愛とも知らず3人の仕丁が焚き火にした紅葉。「エエ心地よいは是で総身があたたまりとんと寒さ忘れた」とご機嫌のところへ、法皇付きの女房に見つかり、告げ口されます。

江戸時代のお馴染みキャラ?!

又五郎「ハテ其様にむごふせいでも詮議は或る事じやはいの」
 平次「何じやまた泣くか」
 藤作「ハハハハ」
 又五郎「オ、おりやまた我れが笑ふので猶悲しい」

この三人上戸、泣き上戸・笑い上戸・怒り上戸の滑稽な会話も芝居の見どころのひとつ。三人上戸は雛飾りのモデルにもなり、京雛では掃除係を表す箒・塵取り・熊手を持つもの、また酒宴をする仕丁も飾られる場合があります。

■ サア是からが根くらべぬかし上げれ!

差しつ差されつ、ほろ酔い加減の平次は小桜にしつこく父の名を明かせと迫りますが、その頑固さに怒りを募らせた平次は「エ、是程事を分けていふに隠しあがる胸ばりめらう斯云ひ出したら金輪際うぬが親の仮名実名聞き抜にや置かぬのじや」と折檻をはじめます。

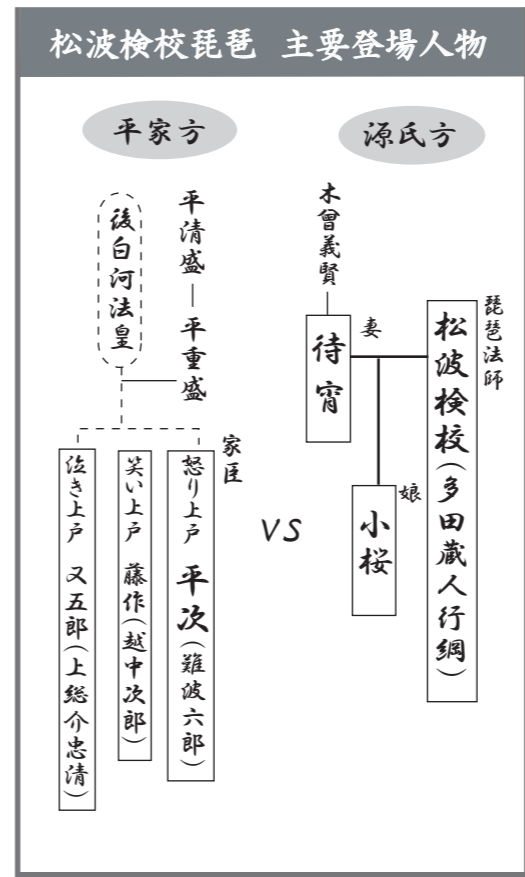
～ 物語る小道具 ～

法皇寵愛の紅葉を焚いたのは狼藉に似て狼藉にあらず、林間に酒を暖めて紅葉を焚くという詩の心たと褒められ、下賜された酒。

■ イ、ヤしらぬ知りませぬ。

「イイエたとへどの様を責にあふても知らぬ事はいつ迄も知らぬわいの」
 竹箒で縛った両手の縄目をねじあげられる小桜。苦しさに叫び声を上げますが、父の名だけは決して口にしません。

心しらせまじ悟られまじと、是非なくも手に取る琵琶の音の、しらべもしどろ恩愛の、
 血筋四筋の糸筋に…*1。



〔参考文献〕
 *1竹中清助編『丸本浄瑠璃名作集』大阪・加島屋竹中書店 1905年9月
 *2『浄瑠璃集 下』日本古典文学大系52 岩波書店 1967年10月
 *3『歌舞伎登場人物事典』白水社 2006年5月
 *4『絵金展 土佐の芝居絵と絵師金蔵』高知県立美術館 1996年
 *5『絵金蔵収蔵品目録』赤岡町 2005年2月
 *6近森敏夫『絵金読本』香南市商工水産課 2006年3月 改訂版